

ポルトガルが残した記憶と遺産 — 「マカエンセ」という人々 —

内藤理佳

上智大学常勤嘱託講師

1. マカエンセ (Macaense, 複数形 Macaenses) とは
2. マカエンセの歴史と現状
3. マカエンセの未来
4. マカエンセの伝統文化
 - 4.1 祭礼行事
 - 4.2 伝統料理—マカエンセ料理
 - 4.3 ポルトガル語系クレオール語—パトゥア語



セナ・デ・フェルナンデス一家(1946年頃)

1. マカエンセ (Macaense, 複数形 Macaenses) とは

【名称】

ポルトガル語： Macaenses

Filhos da Terra 「大地の子」

Os portugueses do Oriente 「東洋のポルトガル人」

中国語：「土生」「土生葡人」

英語 (※)：Macanese 日本語 (※)：マカオ人

※ポルトガル人の子孫だけでなく、広義の「マカオ住民」としても使用される

【マカエンセの一般的定義】

- ① ポルトガル人と中国人の「混血」であること
 - ② マカオ生まれであること
 - ③ マカエンセとしてのアイデンティティ (※) を持ち、マカオ文化を継承していること
- ※ポルトガル文化との密接な関わりを持つ (ポルトガル語を話す・キリスト教徒 (カトリック) である・ポルトガル式教育を受けている、など)
- ※“Portugalidade” (ポルトガリダーデ) という独特の文化・精神性を持つ (ポルトガルとの深い精神的な絆・つながりがある、自らの精神の中核にポルトガルの存在がある)

【マカエンセの総数】

世界規模で2万人強と見積もられる。うち、マカオ在住者は約8千人。その他はポルトガル・カナダ・アメリカ合衆国・オーストラリア・香港などマカオ以外の国や地域に居住 (ディアスポラ)

2. マカエンセの歴史と現状

【マカエンセの誕生とコミュニティの形成】

1513年 ジョルジュ・アルヴァレスが屯門 (現在香港新界周辺) に上陸

1517年 ポルトガル政府、中国との国交を開くためトメ・ピレス率いる使節団を派遣するも失敗、密貿易を余儀なくされる

1543年 ポルトガル人を乗せた中国船、種子島に漂着

1557年～ ポルトガル人、マカオ現地役人に居住費を支払うことでマカオ居住権を獲得・定住
日本と中国 (明) 間の中継貿易 (日本の銀と中国の生糸・絹織物) により多大な差益を獲得。貿易と同時に極東におけるキリスト教布教活動を推進 (ザビエル、フロイス、ヴァリニャーノ)

・ポルトガルの現地婚政策 → ポルトガル人の子孫 (マカエンセ) の誕生

「父親」はポルトガル人

「母親」は初期はゴア・インドシナ・マレー・日本)、ユーラシアン、19世紀以降は中国人

1641年 日本鎖国によりマカオ日本の交渉は断絶、マカオの衰退

※1757年以降、清朝 (1616-1912) の対外貿易を広東 (現在の広州市) 一港に限定。越冬のため、ヨーロッパ商人はマカオを拠点とし、マカオは再繁栄。しかしアヘン戦争 (1840-42) の英国勝利により貿易の中心は香港・上海などの条約港に移り、マカオはふたたび衰退。経済を活性化させるため、賭博業が1847年に合法化→現在のマカオ社会を支えるカジノ産業の始まり

1887年 葡清友好通商条約批准 初めて「正式」にマカオはポルトガル領として認められる

※第三条「ポルトガルは清国の同意なしに第三国にマカオを譲渡することはできない」
→中国の影響は依然として残る

【中国返還以前のマカエンセの社会的(伝統的)地位】

支配層...ポルトガル人 中国語(広東語)を話さない

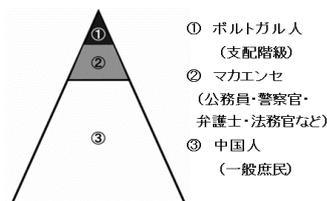
- ① 中間層...マカエンセ ポルトガル語を母語とし、

中国語(広東語)の会話を話す
中級公務員職・警察官・弁護士・法務官などの職業

「東洋のポルトガル人という中国系一般住民に対するエリート意識

- ② 被支配層...中国人 ポルトガル語を話さない

中国返還前のマカオの社会層



- ・中国・ポルトガル両国における政治・社会体制変換期(中国:辛亥革命・中華民国成立・太平洋戦争・マカオ事件、ポルトガル:王政廃止・サラザール独裁体制・民主革命)を経て、中ポ国交樹立(1979)の際にマカオは中国領であることが確認され、中葡共同声明(1987)により中国返還(1999)が決定。マカオにおけるポルトガルの存在が次第にその重要性を失っていく。
- ・第二次世界大戦前の香港・上海への移民、1974年ポルトガル民主革命、1999年返還の時期に、多数のマカエンセがより安定した生活を求め海外に移住。

【中国返還後のマカエンセの現状】

- ・中華人民共和国澳門特別行政区基本法(マカオ基本法)第42条

「マカオのポルトガル系住民の利益はマカオ特別行政区によって法律の範囲の中で保護される。彼らの文化的慣習と伝統は尊重されるべきである。」

⇒ 返還後、一見してマカエンセの文化と伝統は返還以前よりもしっかり守られているように見えるが、実際はどうか?

<教育面>

- ・ 社会の第一言語となった中国語(北京語)の修得が最重要となる。
⇒マカエンセには不利
- ・ポルトガル語は返還後も公用語だが、社会生活上は英語のほうが重視されている。

<出自面>

- ・マカオ在住マカエンセの大多数がポルトガルと関係のないマカオの中国人と結婚。
- ・海外移住者(ディアスポラ)が多数派 →二世・三世はマカエンセとしてのエスニック・アイデンティティやマカオへの愛着を失いつつある。

<精神面・文化面>

- ・中国化が進み、次世代にマカエンセとしてのエスニック・アイデンティティを伝えようとする意識を持たず、必要性も感じない者が20代以下の若い世代に増加。

<社会面>

- ・カジノ産業の自由化（2002年）による大好況を迎え、短いスパンで社会情勢が変化。返還後50年間は民主主義・資本主義の継続が保証されているが、中国化が急速に進行。ポルトガル国籍のマカエンセが中国籍に変更する義務はないが、三権のトップ・管理職は中国籍であることが義務付けられている。職業選択においてもポルトガル籍より中国籍のほうが有利。



カブラルー一家(2016年)

3. マカエンセの未来

<教育面>

- ・ 中国語(北京語) もしくは英語で教育を受ける若者が大多数となるだろう。
- ・ ポルトガル語を母語とするマカエンセが激減するだろう。

<出自面>

ポルトガル人の血を引くマカエンセの数は減少。中国系のマカエンセが増加するだろう。

<精神面・文化面>

マカエンセのエスニック・アイデンティティから、ポルトガルとの深いつながり（ポルトガリダーデ）が消えていくだろう。

<社会面>マカエンセが中国国籍を選択する傾向が加速するだろう。

【新しいエスニシティの可能性】

- ・ ポルトガルもしくは中国に偏った忠誠心・愛国心・関係性などを保有しない。
⇒ マカオに生まれ育ち、マカオに住み、マカオに対する「愛国心」を持つ。
マカオそのものとの精神的関係性・深い絆をアイデンティティの中核に置く。
＝「中国のもうひとつの少数民族」

※マカエンセのエスニック・アイデンティティから「ポルトガリダーデ」が消失するとき、もはや彼らを「マカエンセ」という独立した名称で呼ぶことはできないのではないだろうか？

⇒ 若い世代のマカエンセの取捨選択にコミュニティの未来のゆくえが任されている。

4. マカエンセの伝統文化

ポルトガル式の教育や宗教観をベースとしながら、広東文化ならびにアジア近隣諸国の文化・生活習慣を受け継ぎ発展した、独特の折衷文化

4.1. 祭礼行事

中国式（道教・仏教）祭礼：春節〔旧正月〕、天后祭（旧暦3月23日）、酔龍祭・灌仏祭・譚公祭（旧暦4月8日）、中秋節（旧暦8月15日）など
ポルトガル式（キリスト教）祭礼：パソスの聖体行列（2～3月）、ファティマ聖母の行列（5月13日）、クリスマス（12月25日）など

4.2. 伝統料理—マカエンセ料理

マカエンセの家庭に伝わる伝統料理。ポルトガル人が辿った「大航海」ルートの集大成、すなわちポルトガル料理をベースにして、アフリカ、インド、マレー（インドシナ）、広東料理の原材料やスパイス、料理法を加えた究極の「フュージョン料理」。かつては各家庭の秘伝のレシピとして門外不出のものであったが二十世紀後半に商業化、現在は海外からの観光客にも人気を誇る。

- ・基本調味料・・・バリシャオン Balichão（マレー料理のブラチャン blachang）、スタテ sutate（醤油）、オリーブオイルなど
- ・料理名にパトゥア語（後述）が多用されている
- ・おもな料理



ミンチー



ラカサー

【写真提供：カルロス・アルベルト・アノック・カブラル】

- ミンチー Minchi 豚ミンチ肉を中華鍋でオリーブオイル・醤油などで炒め、フライドポテトを加える
- ラカサー Laccasá ライスヌードルの炒麺もしくはスープ麺
- チャウチャウ・パリダ Chau-chau parida ショウガと鶏肉の料理

中国語で産後の女性の滋養強壮のために良いとされたショウガを使った料理であることからつけられた名前と考えられる。チャウ **chau** 炒は中国語で「炒める」、パリダ **parida** はポルトガル語で「産後の女性」を指す→二言語から作られた料理名



カルロス・アルベルト・アノック・カブラル著

「Comê qui cuza? 食乜野? What to Eat? 何を食べようか?」日本語版 (2016年)

4.3. ポルトガル語系クレオール語—パトゥア語

【パトゥア語のさまざまな名称】

- ・ Patuá, Patoá (<フランス語 patois 農村の方言)
※最も古い名称。なぜフランス語に由来するのかは不明。
- ・ Maquista / Macaísta [ma'kista] ※コミュニティで一般的な呼び名。
マカエンセそのものを指す場合もある。
- ・ Papiá Cristám di Macau 「マカオで話されているキリスト教徒のことば」

【パトゥア語の歴史】

- ・ 16世紀に生まれ、20世紀初頭まで一般的にマカオで話されていたクレオール語。
- ・ ポルトガル人は植民地における国際共通語(リングア・フランカ)をポルトガル語とした。マカオでは、母語が異なる人々が、ポルトガル人および異なるエスニック集団との間の共通語としてより簡単に、かつ早く学習できるような形でポルトガル語を単純化したものがパトゥア語となった。
- ・ 広東語、マレー語・英語・コンカニ語(インド、ゴア州の公用語)・日本語・タミル語・サンスクリット語・ペルシャ語・アラビア語・ヒンドュー語・オランダ語・スペイン語・フランス語・ドラヴィダ語(南インドで話されている言葉)などの影響を受け、ポルトガル語を土台として多様な言語の語彙と体系を持つクレオール語として、マカエンセと一部のマカオ在住の中国人を中心としたコミュニティ間の話し言葉として受け継がれてきた。
- ・ 19世紀後半からマカオにおけるポルトガル語教育が一般化することによって次第に話されなくなり、20世紀初頭以降はほとんど耳にすることはなくなった。現在はマカオ在住もし

くはディアスポラのマカエンセの一部によって話されている（もしくは記憶されている）に過ぎず、消滅の危機に瀕している。ユネスコ指定の世界消滅危機言語のひとつ。

【パトゥア語文法のおもな特徴と表記法】

- ポルトガル語の動詞（不定詞の-r がぬける）、それ以外の言語（マレー語など）の動詞が元となる。

例：*andá* (ポルトガル語 *andar* 歩く), *chipí* (マレー語 *cipir* 触る)

- 活用形はポルトガル語の三人称単数形もしくは複数形がもととなり、一種類しかない。

※以下、カッコ内はポルトガル語の単語

例：*sâm* (*ser*), *tem* (*ter, haver, estar em*), *pódi* (*poder*), *vivo* (*viver*), *sábi* (*saber*)

- 主格人称代名詞（～は）を表す単語のうち、ポルトガルでは相手を表す言葉を親しい相手 (*tu*) とそうでない相手 (*você*) にはっきり区別し、また、三人称単数 (彼 *ele* 彼女 *ela*) と三人称複数 (彼ら *eles* 彼女ら *elas*) も性別によって異なるが、パトゥア語にはその区別がなく、一種類である。

例：～である *sâm* (不定詞 *ser* 三人称複数形 *são*)

Iou sâm 私は～です (*eu sou*) / *Vós sâm* あなたは～です (*tu és/você é*)

Ele sâm 彼 (彼女) は～です (*ele/ela é*) / *Nos sâm* 私たちは～です (*nós somos*)

Vosotro sâm (vós sois)あなたがたは～です/*Ilotro sâm* (*eles/elas são*) 彼ら (彼女ら) は～です

- 現在形は動詞をそのまま使う。

例：*Iou vai iscóla.* (*Eu vou para a escola.*) 私は学校に行く。

- 現在進行形には **ta** を動詞の前につける。

例：*Iou ta vai iscóla.* (*Estou a ir para a escola.*) 私は今学校に行く途中だ。

- 過去形には **já** を動詞の前につける。

例：*Iou já vai iscóla.* (*Eu fui para a escola.*) 私は学校に行った。

- 未来形には **lôgo** を動詞の前につける。

例：*Iou lôgo vai iscóla.* (*Eu irei para a escola.*) 私は学校に行くだろう。

- 複数形は単語を二回並べる (マレー語が元)。

例：*casa-casa* = "casas" 「複数の家(casa)」 *china-china* = 「中国人、中国産の物」

Ôlo batê-batê 「目をぱちぱちする」 ポルトガル語：目 *olho*, 打つ *bater*

※ただし、ポルトガル語で *bater olho* とは言わない

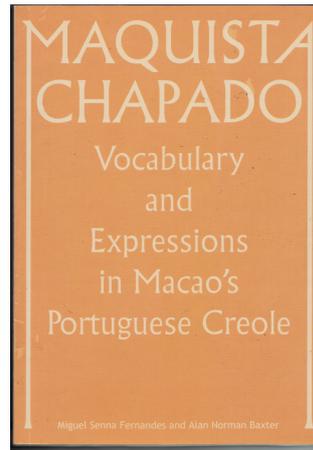
- 定冠詞はない。

- 所有を表すときは主語のうしろに **-sa** がつく。

例：*êle-sa casa* 彼の家 (*a casa dele*) *Iou-sa filo* 私の息子 (*o meu filho*)



パトゥア語＝ポルトガル語辞書
『マキスタ・シャパード』※



同書の英訳(2004年)

Miguel de Senna Fernandes/ Alan Baxter 著 (2001年)

※パトゥア語で「ありのままのマカエンセ」を意味する

【パトゥア語継承運動】

・パトゥア語詩人 ジョゼ・ドス・サントス・フェレイラ (愛称: アデー)

José dos Santos Ferreira(Adé) (1919-1993)



マカオ市内中心街にあるアデーの銅像

1919年 八人きょうだいの末っ子としてマカオに生まれる。

1924年 (5歳) 父を亡くし、貧しい少年時代を送る。

1936年 (17歳) 中学校を卒業後 17歳で公務員として働き始める

- 1964年(45歳) 澳門旅遊娛樂 (STDM) 社 (社長はマカオのカジノ王スタンレー・ホー) 管理職として転職。その他、マカオの慈善事業協会理事、中国人学生を対象としたポルトガル語講師、マカオ・香港のポルトガル語系・英語系新聞・雑誌の編集者・執筆者、ポルトガル本国の主要新聞の海外特派員として活動。同時にパトゥア語詩人として多くの詩・演劇・オペレッタなどさまざまなジャンルの作品を書き残し、ラジオやテレビの番組を通してパトゥア語による朗読を行なう。
- 1979年(60歳) エンリケ航海王子勳章受勳
- 1984年(65歳) マカオからメリト勳章 Medalha de Mérito 受勳
- 1993年(73歳) 香港で死去

- ・パトゥア語劇団 Dóci Papiáçam di Macau (パトゥア語で「マカオの甘い言葉」)



【写真】2016年第27回マカオ芸術祭出展作品

"Unga Chá di Sonho" (一杯の茶が見せた夢) 公演後風景 (2016年5月)

※最前列中央の男性が主宰のミゲル・デ・セナ・フェルナンデス

- 1992 マカエンセの作家、エンリケ・セナ・フェルナンデスの親戚の女性が劇団結成アデーも企画に携わる。
- 1993 アデーの死後、ポルトガル大統領マリオ・ソアレスを迎えてマカオで初回公演
エンリケの息子、ミゲル・デ・セナ・フェルナンデスが劇団主宰となる
以後毎年新作を発表
- 1997～ マカオ国際芸術フェスティバル (毎年5月) に新作を発表
- 2012 パトゥア語劇(土生土語話劇)とマカエンセ料理 (土生葡人美食烹飪技藝) が
マカオ特別行政区の無形文化遺産として正式に認定される

- ・作品は古典ではなくつねにオリジナルの現代劇

- ・その年の時事や社会現象をテーマに批判的な眼で表現したコメディが中心となっている
- ・公演の際には同時進行の形で後方にポルトガル語・中国語（広東語）英語の字幕がつく
- ・俳優たちはすべてアマチュア。各公演の二か月前から毎晩集まって役作りに励む
- ・「パトゥア語を若い世代に伝えたい」という劇団の目的を果たすため、パトゥア語を全く知らない若い世代を常に募集して毎回新しいメンバーが加わる

<参考文献・関連サイト一覧>

- 塩出浩和(1999) 『可能性としてのマカオ—曖昧都市の位相』 亜紀書房.
- 東光博英(1998) 『マカオの歴史—南蛮の光と影』 大修館書店.
- 内藤理佳 (2014) 『ポルトガルがマカオに残した記憶と遺産—マカエンセという人々』, 上智大学出版.
- Ana Maria Amaro (1988) Filhos da Terra: Reviv of Culture No.20 (2nd series) July/September 1994 English Edition:13-67, Macau: Instituto Cultural de Macau.
- Carlos Alberto Anok Cabral (2013) Comê qui cuza? 食乜野? What to Eat?, Macau: Carlos Alberto Anok Cabral.
- Carlos Alberto Anok Cabral(2016) Comê qui cuza? 食乜野? What to Eat?,何を食べようか? Macau: Carlos Alberto Anok Cabral, 内藤理佳 (日本語訳)
- Carlos Marreiros (1994) Adé dos Santos Ferreira Fotobiografia, Macau: Fundação Macau.
- Miguel de Senna Fernandes and Alan Baxter (2001) Maquista Chopado, Macau: Instituto Internacional de Macau.
- Miguel de Senna Fernandes and Alan Baxter (2001) Maquista Chopado-Vocabulary and Expressions in Macao's Portuguese Creole, Macau: Instituto Português do Oriente.
- マカオ観光局公式ホームページ (日本語) <http://jp.macaotourism.gov.mo/index.php>
- Macau Sâm Assi(This is Macau) – Dóci Papiaçám di Macau (プロモーションビデオ)
<https://youtube/JmPYVbKWF70>